

(94)

印度學佛教學研究第 64 卷第 1 号 平成 27 年 12 月

四智讚の成立と展開

徳 重 弘 志

1. はじめに

四智讚とは、真言宗の常用經典である『般若理趣經』(AdhŚ)¹⁾の前後に唱える偈頌である。そのうち、前讚ではサンスクリットの音写(四智梵語)で、後讚では漢訳(四智漢語)で、同内容の偈頌を唱えることになっている。この偈頌は、AdhŚ自体には記されていないため、他の經典から導入したものであると判断できる。

一般に、AdhŚの前後に唱える四智讚の典拠は、『真実摂經』(STTS)であると考えられてきた。しかし、先行研究には、AdhŚの前後に唱える四智讚の典拠、AdhŚの前後に唱える理由、AdhŚの前後に唱える仕方を伝えた人物、といった点に問題が残されている。本稿では、それらの問題について解明を試みた。

2. 四智讚が説かれる諸文献

管見の限りでは、8種類の經典と、6種類の儀軌類に四智讚が説かれている²⁾。

[經典] ①STTS³⁾、②『略出念誦經』⁴⁾、③『金剛頂タントラ』⁵⁾、④『降三世大儀軌王』⁶⁾、⑤『理趣廣經』(ŚP)⁷⁾、⑥『秘密三昧經』⁸⁾、⑦『大秘密王曼荼羅』⁹⁾、⑧『摩里支菩薩經』¹⁰⁾。

[儀軌類] ⑨『摂大儀軌』¹¹⁾、⑩『大日經持誦次第儀軌』¹²⁾、⑪『毘盧遮那三摩地法』¹³⁾、⑫『一字頂輪王瑜伽念誦儀軌』¹⁴⁾、⑬『文殊師利菩薩供養儀軌』¹⁵⁾、⑭『金剛童子念誦法』¹⁶⁾。

以上の文献における四智讚の機能は、「撥遣するための供養」(①、②-2、⑤-2、⑪)、「曼荼羅への入住」(⑤-1、⑥、⑦)、「供養」(②-1、③、④、⑨、⑩、⑫、⑯)、「真言」(⑧-1、⑧-2、⑬)といった4種類に分類することができる。なお、漢訳においては、当該の偈頌を音写した文献(①、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑪、⑫、⑯)と、漢訳した文献(②、⑩)とが存在する。

また、当該の偈頌は、①STTSにおいては vajrastutigīta (Tib. rdo rje bstod pa'i glu;

Chi. [不空] 金剛歌詠；Chi. [施護] 金剛歌），⑤ŚPにおいては rdo rje glu (Chi. 金剛歌)と呼称されているように、インドで撰述された文献には「四智讚」という名称は見られない¹⁷⁾。

なお、上掲の文献の大半は『金剛頂經』系であるが、⑨『摂大儀軌』と⑩『大日經持誦次第儀軌』は、『大日經』系の儀軌類である。『大日經』自体には四智讚が存在しないことから、『金剛頂經』系のいずれかの經典から、これらの儀軌類に導入されたと判断できる。特に、⑩『大日經持誦次第儀軌』に関しては、四智讚が漢訳されていることから、②『略出念誦經』の影響を受けていると推定できる。

3. 『般若理趣經』の前後に唱える四智讚の検討

AdhŚの翻訳者が不空であることから、本經の前後に四智讚を唱えるという仕方は、少なくとも不空以降に中国や日本に伝わったと判断できる。仮に、その仕方を伝えた人物が不空ならば、AdhŚの前後に四智讚を唱える理由は、彼が知り得た範囲の文献に記されていると予測できる。

不空訳とも不空撰述ともいわれる『十八会指帰』(大正 no. 869)では、広本としての『金剛頂經』の内容を十八会にわたって略述しているが、それらは現存するいくつかの經典と同定されている¹⁸⁾。上掲の諸文献うち、十八会と同定されている經典としては、①STTS(初会)、③『金剛頂タントラ』(第二～三会)、④『降三世大儀軌王』(第四会)、⑤ŚP(第六～八会)、⑥『秘密三昧經』(第十三会)が挙げられる。さらに、②『略出念誦經』は、①STTSの「金剛界品」に相当する部分の略出であるという説が存在するように、①STTSと強い関係性を有している。

これらのうち、③『金剛頂タントラ』¹⁹⁾と④『降三世大儀軌王』は、①STTS以後の成立であり、両經典における偈頌の機能からも、AdhŚの前後に唱える四智讚の典拠とはなり得ない。また、⑥『秘密三昧經』は、不空の時代には原初形態であり、AdhŚの前後に唱える四智讚の典拠とはなり得ない。そのため、典拠となる可能性が存在するのは、①STTS、②『略出念誦經』、⑤ŚPということになる。

まず、①STTSでは、曼荼羅に召請した諸尊を「撥遣するための供養」の際に、四智讚が用いられている。

tataḥ pūjāguhyamudrām udāharan, guhyapūjācatuṣṭayam kāryam, anena vajrastutigītena gāyan //
 om vajrasatvasamgrahād vajrаратnam anuttaram /
 vajradharmagāyanaiś ca²⁰⁾ vajrakarma[ka]ro bhava //
 tato 'bhyantaramaṇḍale 'py anenaiva vajrastutigītena vajranṛtyakarapuṭena guhyadhūpādibhiḥ

pūjā kāryā /

tato bāhyamaṇḍale vajradhūpādibhiḥ pūjāṁ kṛtvā, tāḥ pūjāḥ svasthāneṣu sthāpayet / tataḥ sarve yathāśaktyā pūjayantv iti //

STTSにおける偈頌の機能は、AdhŚの後讚として四智讚が用いられる理由になり得る。しかし、AdhŚの読誦前に「撥遣するための供養」が行われるとは考え難く、前讚として四智讚が用いられる理由にはなり得ない。

次に、②『略出念誦経』では、四智讚が2箇所に用いられている。前者の用例では、単なる「供養」の際に四智讚が用いられており、当該の問題を解決する手掛かりとはなり得ない。他方、後者の用例では、「撥遣するための供養」の際に、四智讚が用いられている。このうち、後者の偈頌の機能については、STTSと同様のことがいえる。

最後に、⑤ŚPでは、四智讚が2箇所に用いられている。前者の用例では、曼荼羅に諸尊を召請するのに先立ち、「曼荼羅への入住」²¹⁾のために、四智讚が用いられている。

de la 'jug pa²²⁾ la sogs pa'i²³⁾ cho ga rgyas pa'i khyad par ni 'di yin te / de bzhin gshegs pa thams cad la phyag bya ba'i²⁴⁾ phyag rgya dang rdo rje'i²⁵⁾ glu 'dis²⁶⁾ 'jug par bya'o²⁷⁾ //
rdo rje sems dpa' bsdus pa yis²⁸⁾ // rdo rje rin chen bla na med //
rdo rje chos ni glur blangs pas // rdo rje²⁹⁾ las ni byed par 'gyur //
 de nas rab tu zhugs³⁰⁾ nas de bzhin gshegs pa thams cad kyi ye shes kyi³¹⁾ gzungs bde ba chen po rdo rje gsang ba'i lcags kyus dgug par bya'o //

後者の用例では、「撥遣するための供養」の際に、四智讚が用いられている。

de nas de bzhin gshegs pa thams cad kyi³²⁾ rigs kyi mchog tu gsang ba'i dam tshig gi 'jug pa'i rdo rje glu'i mchod pa ni /
rdo rje sems dpa' bsdus pas na³³⁾ // rdo rje rin chen bla na med //
rdo rje chos ni glur³⁴⁾ blangs pas // rdo rje las ni byed par 'gyur //

ŚPにおける偈頌のうち、前者の「曼荼羅への入住」という機能は、AdhŚの前讚として四智讚が用いられる理由になり得る。他方、後者の「撥遣するための供養」という機能は、AdhŚの後讚として四智讚が用いられる理由になり得る。このことから、AdhŚの前後に唱える四智讚の典拠は、ŚPであると推定できる。

ここで問題となるのが、不空がインドに滞在した時点におけるŚPが、現行のチベット語訳のような完本であったか否かである。ŚPが漢訳されたのは宋代であり、漢訳には「曼荼羅への入住」の用例が存在する章を含む、チベット語訳には

存在するいくつかの章が欠落している³⁵⁾.

この問題に対する説には、近年提唱されている AdhŚ, ŚP, STTS の順に經典が成立したとする説に従えば、不空の活動時期には ŚP が完成段階にあったと推定できる³⁶⁾。また、それを裏付けるように、不空訳の『理趣釈』(大正 no. 1003) には、現行のチベット語訳の ŚP を構成する「般若分」、「真言分・大樂金剛秘密」、「真言分・吉祥最勝本初」という 3 編からの引用が、それぞれ確認されている³⁷⁾。

また、宋代における ŚP の漢訳に、「曼荼羅への入住」の用例を含む章が欠けているということは、中国や日本の僧侶達は、同一經典中に前讃と後讃としての四智讚を説く文献を知り得なかったということになる。そのため、AdhŚ の翻訳者であり、インドに滞在した経験を有する不空こそが、同經典の前後に四智讚を唱える仕方を伝えた人物であると推定できる。

最後に、四智讚の展開に関しては、ŚP において「曼荼羅への入住」と「撥遣するための供養」の際に用いる偈頌として四智讚が成立し、そのうちの前者の機能が『秘密三昧經』や『大秘密王曼荼羅』へと継承され、後者の機能が STTS や『略出念誦經』に継承されたと推測できる。

4. おわりに

本稿では、AdhŚ の前後に唱える四智讚について、その典拠、唱える理由、その仕方を伝えた人物について考察を行った。第一に、典拠については、従来の学説では STTS と見なされていたが、偈頌の機能や經典の成立順序を根拠として、ŚP が典拠であると推定できる。第二に、理由については、前讃には「曼荼羅への入住」、後讃には「撥遣するための供養」という機能が存在することが判明した。第三に、人物については、ŚP の漢訳における章の欠落を根拠として、AdhŚ の翻訳者である不空だと判断できる。

-
- 1) 大正 no. 243. なお、梶芳 [1980: 150–153] によれば、訳出年代は 763–771 年の間である。
 - 2) 紙幅の都合上、いずれも略称または通称を示す。なお、列挙するのはインド撰述あるいは翻訳文献のみとし、中国や日本で撰述された文献は第二次資料として扱う。
 - 3) [Skt.] 堀内 [1983: 208 (§314)] ; [Tib.] D no. 479, nya 35a1–2; P no. 112, nya 38a2–3; [Chi. (不空)] 大正 no. 865, 18: 223a26–28; [Chi. (施護)] 大正 no. 882, 18: 359a20–23.
 - 4) [用例 1] 大正 no. 866, 18: 248a7–8. [用例 2] 大正 no. 866, 18: 253b20–21.
 - 5) D no. 480, nya 226a5–6; P no. 113, nya 253a6. なお、当該箇所の和訳に関しては、北村・タントラ仏教研究会 [2012: 256] を参照。

(98)

四智讃の成立と展開（徳重）

- 6) D no. 482, *ta* 52b2; P no. 115, *ta* 46b7. なお、当該箇所の和訳に関しては、北村・タントラ仏教研究会 [2014: 109] を参照。
- 7) [用例 1] D no. 488, *ta* 181b5; P no. 120, *ta* 187b6. [用例 2] [Tib.] D no. 488, *ta* 232b5; P no. 120, *ta* 242a6; [Chi.] 大正 no. 244, 8: 816b3-6. なお、用例 1 を含む章の校訂テクストと和訳に関しては、拙稿 [2015] を参照されたい。
- 8) 大正 no. 883, 18: 446c8-11.
- 9) 大正 no. 889, 18: 554c8-10.
- 10) [用例 1] 大正 no. 1257, 21: 278a25-28. [用例 2] 大正 no. 1257, 21: 283c2-5.
- 11) 大正 no. 850, 18: 68a29-b3.
- 12) 大正 no. 860, 18: 185a23-24.
- 13) 大正 no. 876, 18: 330b2-5.
- 14) 大正 no. 957, 19: 324a16-b2.
- 15) 大正 no. 1175, 20: 720b19-22.
- 16) 大正 no. 1223, 21: 131b20-23.
- 17) 管見のおよぶ限りでは、「四智讃」という名称の初出は法全集『供養護世八天法』(大正 no. 1295) であり、日本においては安然記『胎藏界大法対受記』(大正 no. 2390) および『金剛界大法対受記』(大正 no. 2391) に初めて用例が確認される。また、「四智梵語」という名称の初出は『大原声明博士図』(大正 no. 2715) であり、「四智漢語」という名称の初出は宗快撰『魚山目録』(大正 no. 2714) である。
- 18) 十八会と同定される經典については、田中 [2010: 154] を参照。
- 19) 『金剛頂タントラ』は、ŚP の經典名に言及した上で、その記述を幾度か引用している。その一例としては、北村・タントラ仏教研究会 [2012: 202] が挙げられる。このように、十八会の順序は、必ずしも經典の成立順序と対応するとは限らない。
- 20) 宮坂 [2014: 6-7] は、堀内 [1983: 209 (註 2)] の記述を根拠として、ca が校訂の際に補われたものであるという前提で自説を展開している。しかし、STTS のサンスクリット写本 (酒井 [1979: 42b7]) には、ca という語句が存在している。
- 21) 拙稿 [2015: 151-152] では、引用文中の'jug pa や rab tu zhugs を「引入」と誤訳していたので、「入住」へと訂正させていただきたい。
- 22) pa] C D H J U : om. L N P S T Y.
- 23) pa'i] C D H J P U : pa yi L N S T.
- 24) ba'i] C D H J L N P S T U : kyi Y.
- 25) rje'i] C D H J P U : rje L N S T.
- 26) 'dis] C D H J N P S T U : 'dil L.
- 27) bya'o] C D J L N P S T U : bya 'o H.
- 28) yis] D H J L N P S T U : yi C.
- 29) rje] C D H J P U : rje'i L N S T.
- 30) zhugs] H L N S T : bzhugs C D J P U.
- 31) kyi] C D H J L P S T U : kyis N.
- 32) kyi] D : kyis H N.

- 33) bsdus pas na] D : bsdus pas nas N ; sdus pas na P Y.
 34) glur] H N : glu D.
 35) ŠP は、999 年に漢訳された。なお、訳出年代に関しては、武内 [1976: 48] を参照。
 36) 当該の經典の成立順序に関しては、田中 [2010] および拙稿 [2010, 2013a, 2013b] を参照されたい。
 37) 福田 [1987: 35–42] を参照。

〈略号〉

AdhŚ: 『般若理趣經』 (*Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā*). **H:** ラサ版チベット大藏經. **J:** ジャンサタム／リタン版チベット大藏經. **L:** ロンドン／シェルカル写本チベット大藏經. **S:** トクパレス写本チベット大藏經. **ŠP:** 『理趣廣經』 (*Śrīparamādya*). **STTS:** 『真実撰經』 (*Sarvatathāgatataattvasamgraha*). **T:** 東京写本チベット大藏經. **U:** ウルガ版チベット大藏經.

〈参考文献〉

- 梶芳光運 1980 『大乘佛教の成立史的研究』 原始般若經の研究 1, 山喜房佛書林.
 北村太道・タントラ仏教研究会 2012 『全訳 金剛頂大秘密瑜伽タントラ』『金剛頂經』系密教原典研究叢刊 1, 起心書房.
 ——— 2014 『全訳 降三世大儀軌王／同 ムディタコーシャ註釈』『金剛頂經』系密教原典研究叢刊 3, 起心書房.
 酒井真典 1979 『梵文初会の金剛頂經 S 本』 遍照光院歴世全書 6, 遍照光院.
 武内孝善 1976 「宋代翻訳經典の特色について 附・宋代翻訳經典編年目録」『密教文化』 113: 27–53.
 田中公明 2010 『インドにおける曼荼羅の成立と発展』 春秋社.
 徳重弘志 2010 「『理趣經』 初段の重説部分について」『印度学仏教学研究』 59 (1): 96–99.
 ——— 2013a 「『理趣廣經』における灌頂について」『印度学仏教学研究』 61 (2): 95–99.
 ——— 2013b 「『理趣廣經』の灌頂における阿闍梨の作法について」『印度学仏教学研究』 62 (1): 97–101.
 ——— 2015 「『理趣廣經』「真言分」のプラダク写本について——資料編——」『高野山大学密教文化研究所紀要』 28: 147–165.
 福田亮成 1987 『理趣經の研究——その成立と展開——』 国書刊行会.
 堀内寛仁編 1983 『初会金剛頂經の研究 梵本校訂篇（上）』 密教文化研究所.
 宮坂宥峻 2014 「四智讚の背景思想について」『大正大学大学院研究論集』 38: 1–21.

〈キーワード〉 四智讚, 四智梵語, 四智漢語, 『般若理趣經』, 『理趣廣經』, 『真実撰經』
 (高野山大学密教文化研究所受託研究員, 博士(密教学))